

あとがき

本報告書は、2012 年 11 月 13-17 日、国際日本文化研究センターにおいて行われた第 44 回国際研究集会「東アジアにおける知的交流——キイ・コンセプトの再検討」で発表された諸報告をもとに編集したものである。共同研究「東アジア近現代における知的交流——概念編成を中心に」(2010-12 年度・鈴木貞美代表)の最終報告会として開催された今回の研究集会には、日本をはじめ、中国や台湾、韓国などから総勢 30 数名の研究者が参集し、公開講演会の基調報告と各報告、また国際シンポジウムのセッション報告を合わせて、計 29 名が研究発表を行った。ただ、諸般の事情により、そのうちの 5 報告を割愛せざるを得ず、本書には、最終的に計 24 本の研究論文を収録した。

本研究集会のテーマである近代東アジアのキイ・コンセプト=鍵概念については、これまで国際日本文化研究センターにおいて、すでに 5 回にわたる共同研究と 10 回にのぼる国際シンポジウムを開催し、その成果としても 9 冊の研究報告書を刊行してきた。本報告書を含むこの一連の経緯については、以前の報告書の「あとがき」でも触れたことがあるが、それをもう一度確認するという意味で、ここに改めて時系列的に並べておく。

共同研究

- ① 2003-06 年度「出版と学芸ジャンルの編成と再編成——近世から近現代へ」(鈴木貞美代表)
- ② 2004 年度「近代東アジアにおける二字熟語概念の成立に関する総合的研究」(馮天瑜代表)
- ③ 2006 年度「近代東アジアにおける知的空間の形成——日中学術概念史の比較的研究」(孫江代表)
- ④ 2007-09 年度「東アジアにおける知的システムの近代的再編成」(鈴木貞美代表)
- ⑤ 2010-12 年度「東アジア近現代における知的交流——概念編成を中心に」(鈴木貞美代表)

国際シンポジウム

- ① 2004 年 2 月 10 日「日中漢語概念の往還」
- ② 2005 年 8 月 26-29 日「東アジアにおける近代諸概念の成立」
- ③ 2006 年 12 月 16-18 日「歴史文化概念の再検討」(武漢大学・日文研共催)
- ④ 2007 年 3 月 23-25 日「東アジアにおける学芸史の総合的研究の継続的發展のために」
- ⑤ 2007 年 10 月 16-18 日「東アジアにおける近代諸概念の生成と展開」(北京大学・日文研共催)
- ⑥ 2008 年 11 月 17-20 日「東アジア近代における概念と知の再編成」
- ⑦ 2009 年 11 月 25-27 日「近代東アジアにおける鍵概念——民族、国家、民族主義」(中山大学・日文研共催)
- ⑧ 2010 年 9 月 23-25 日「東アジアにおける知的体系の再構築——日本と中国の視座」(南京大学・日文研共催)

- ⑨ 2012 年 11 月 13-17 日「東アジアにおける知的交流——キイ・コンセプトの再検討」
⑩ 2013 年 3 月 18 日「東亞近代知識轉型中的關鍵概念詞」（中央研究院・日文研共催）

成果出版

- ①『語義的文化変遷』（中国語、馮天瑜・劉建輝・聶長順編）武漢大学出版社、2007 年 10 月
②『東アジアにおける知的システムの近代的再編をめぐって——北京大学国際シンポジウム 2007 より』（鈴木貞美・劉建輝編）国際日本文化研究センター、2008 年 3 月
③『東アジア近代における概念と知の再編成・国際シンポジウム 35』（鈴木貞美・劉建輝編）国際日本文化研究センター、2010 年 3 月
④『近代東アジアにおける鍵概念——民族、国家、民族主義』（鈴木貞美・劉建輝編）国際日本文化研究センター、2011 年 3 月
⑤『東アジアにおける近代諸概念の成立・国際シンポジウム 26』（鈴木貞美・劉建輝編）国際日本文化研究センター、2012 年 3 月
⑥『東アジアにおける学芸史の総合的研究の継続的發展のために・国際シンポジウム 31』（鈴木貞美・劉建輝編）国際日本文化研究センター、2013 年 3 月
⑦『亞洲概念史研究 第一輯』（中国語、孫江・劉建輝編）三聯書店、2013 年 4 月
⑧『東アジアにおける知的交流——キイ・コンセプトの再検討・第 44 回国際研究集会』（鈴木貞美・劉建輝編）国際日本文化研究センター、2013 年 11 月
⑨『東アジアにおける近代知の空間の形成』（孫江・劉建輝編）東方書店、2013 年 12 月刊行予定

このように、本研究集会は、いわばちょうど 10 年にわたる「概念」研究の最終報告という性質を持っており、その開催は、共同研究主宰者の鈴木氏によって「運動」と称されてきた一連の研究活動の総括であると同時に、長年にわたってこの「運動」に協力していただいた内外の諸先生方に対する感謝でもあったのである。

そして、この趣旨に相応しく、本報告書に収録された 24 本の論文は、いずれも群を抜く力作で、当研究のさらなる深化に大いに資するものとなっている。ただこれをめぐる評価については、編者の一人である私がここで自画自賛するよりも、やはり広く読者諸氏にその判断を委ねることとしよう。

最後に、4 日間の会議にご出席いただき、またご多忙にもかかわらずご論文をお寄せくださった諸先生方、関係者の皆様に、改めて深く感謝の意を表したい。

2013 年 11 月

劉建輝